HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	万葉集羈旅歌の研究 : 行旅歌における「家の妹」と＜羈旅＞主題［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	関谷, 由一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12072号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61694
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuichi_Sekiya_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：関谷由一

主査　准教授　金沢英之
審査委員：副査　准教授　野本東生
副査　教　授　押野武志

学位論文題名：万葉集羈旅歌の研究―行旅歌における「家の妹」と〈羈旅〉主題―

本論文は、『万葉集』の理解に関する内外の最新の知見にもとづき、古代の旅の歌の内容をあらためて問い直し、その実質を再検討することを目指すものである。そのような観点から、第一部では従来の論の問題点を「家の妹」という概念の再検討によって示し、つづく第二部では、万葉集中の「羈旅」に関わる歌をとりあげ、各論的に論じることを通じて、全体として「羈旅」主題のもとに成り立った旅の歌の表現性の発展を示す。

上記のような方法に立つ本論文は、全体として、『万葉集』の重要な部分を構成する旅の歌（行旅歌）について、従来強固な理解の枠組みとなってきた捉え方（大和・都にある「家の妹」が象徴する〈家郷〉への回帰の願望に基づくとする理解の方向）の問い直しへとつながる、非常に意欲的なものと評価できる。論者はまず万葉の旅の歌の古い類型である留守歌の表現性を再検討することから始め、そこに従来言われてきたような、家を離れ旅にある夫への危惧や呪的共感ではなく、むしろ行幸など公の旅にある夫への讃歎性を認めるべきことを見出だした。こうした視角を梃子に、従来旅の歌の典型とされてきた作品の再解釈を図り（第一部）、つづいて論者が旅の歌の発展史において重視する「羈旅」関連の作品群を個別に論じることで、留守歌に見出だしたような讃歎性を基盤に持ちつつ、王権の中心からの移動にともなってあり得たさまざまな情の表出として、羈旅歌の表現性の展開を描き出した（第二部）。個々の論での緻密な作品分析が全体としての大きな構成を支え、論者の考える旅の歌の表現史を説得性をもって提示することに成功している。また、そのように表現史を再構築することで、旅の歌が『万葉集』の中でつくりだすものを、天皇を中心とした「公」の世界を前提としてなり立つ「私」の情の世界として摘出して見せた点は、『万葉集』全体をどのような作品として理解するかというアクチュアルなテーマに直結するものとして高く評価される。

論者は、修士論文から一貫してこの『万葉集』の旅の歌というテーマに取り組んできており、本論八章のうち四章分をすでに査読付き専門誌上に公開し、他の研究者によって引用される等一定の成果を挙げている。また残りの部分についても、多くが専門学会にて発表されたものであり、今後も順次投稿論文として刊行することを予定している。

口述審査の席上では、歌表現の展開そのものと、『万葉集』の編纂によって「羈旅」の題

や標目を与えられ「羈旅歌」として形作られていったものとをどう峻別するかといった問題や、行路死人歌をはじめ本論文で題材として取り上げられなかった種類の旅の歌との関係をどのように見ていくかといった課題が指摘されたが、本論文の主旨や統一性を損なうものではなく、むしろそうした点に今後のさらなるテーマの発展が期待される。

以上の審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。